

村田 正 志博士校訂

## 『花園天皇宸記』第一卷

今 江 広 道

第九十五代花園天皇は、御歴代の中に於ても稀に見る「英明な天子」「明君であらせられた」とは、辻善之助博士の言である（『花園天皇』、同氏著『日本文化史別録二』所収）。その御伝記は、岩橋小弥太博士の『花園天皇』（『人物叢書』所収）に詳しいが、天皇には浩瀚な御日記があり、その原本の多くは永く伏見宮家に伝来したが、昭和二十五年、宮内庁書陵部の架蔵するところとなった。

宸筆の御日記が、かくも多量に現存するのは他になく、またその内容が、鎌倉時代末期の殆んど唯一のまとまった記録であり、当時の政治・文化・社会・宗教・学問などを知り得る貴重な史料として珍重され、既に和田英松博士校訂の『列聖全集——宸記集（下）』所収本と、矢野太郎氏校訂の『史料大成』所収本として、過去二回、翻刻されてをり、今回の村田博士の校訂による翻刻は、三回目である。

校訂に当られた村田博士は、周知の如く、南北朝時代の研究では、自他共に許す第一人者であり、且つ前二回の翻刻に誤りの多いのを遺憾とし、「全巻を厳密に原本と対校の上、今一度刊行したい」と念願してをられたといふから（人物叢書附録99号『花園天皇宸記を読む』）、正にその人を得たといふべきで、ここに目出たくその第一冊の刊行をみた事は、国史学界の慶事であり、博士に對しても心よりお祝申し上げる次第である。

宸記は、延慶三年（一三二〇）十月一日より元弘二年（一三三二）十一月十六日までの分が現存するが、今回の冊に収められたのは、最初より文保二年（一二二八）正月七日までの分である。延慶三年と言へば、天皇は御歳十四、即位後三年目に当り、文保二年二月には、後醍醐天皇に譲位されるので、本冊は御在位中の宸記の全てに相当することになる。

原本を拝見すると、お若い頃のもの、特に文章御推蔽の跡が著しく、加除訂正が甚だしい（その一端は、本冊の口絵写真参照）。一般に原本より翻刻する時は、原本に忠実に、墨抹乃至重ね書きされた文字も翻刻するのが建て前であるが、この宸記の場合は、余りにそれが甚だしいから、組版の都合もあり、翻刻は最終的な確定本文のみに止められたのは、万止むを得ぬことであらう。ただこの点について、巻首の「凡例」には、何等触れられてゐない。これは翻刻の方針に関する事であるから、当然「凡例」に触れられるべきであつたと思ふ。

宸記は全て卷子本であるが、永い伝来の間に紙の継ぎ目が離れ、本来のあるべき位置を失ってしまったものがある。和田博士は、内容などから、年次を推定されたが、なお年次のわからぬものが三断簡残つた。宸記集本P 644～P 645に「年月不分明」「年月日不分明」とあるのがそれである。矢野氏もこれに検討を加へ「年月不分明」の一紙を応長元年十一月と推定し（史料大成本（二）P 238）、「年月不分明」の分を応長元年閏六月九日以降、十二月までのものと推定された（同上P 238）。これに対し村田博士は、前者を正和元（応長二）年十一月の所に収め（P 56）、後者の中、「天晴、観音供……」の記事を、正和二年七月十八日のものと断じ（P 89）、「奉行職事資榮朝臣」に始まるものを、応長元年十二月十五日条の記事の一部と推定して（P 30）、それぞれの位置に収められた。即ち和田・矢野両氏がなし得なかつた事を村田博士は達成され、すべて然るべき年月日が与へられて、その年次の所に収められた事になる。これは博士の大

きな功績である。何故ならば、正確な年月日の判明によつて、その記事の価値が数倍増すからである。ただその論拠は、本の性質上、示されてゐない。最終冊の「解題」に於て、何卒その論拠を示していただきたいと思ふ。

次にこれに関連して残念に思ふのは、前二回と同様、今回も、各巻の現状に於ける巻次と張附け（紙継目）が全く注記されなかつた事である。最近では、原本乃至古写本を翻刻する時は、これ等を注記するのが一般化してゐるし、特にこの宸記の如く、糊離れによる不連続巻の多い原本では、後学の者が校訂者の年次推定の是非を考へる場合や、若し将来、宸記の断簡が出現した場合などに役立つと思ふからである。

この宸記の原本は、白紙に書かれたもの（全文宸筆）と、具注曆に書かれたもの（月・日・干支等は陰陽寮官人が書く、本文は宸筆）の二種がある。村田博士は宸筆と然らざる部分を厳密に区別され、陰陽寮官人の書いた部分は、すべて上下に「」を附けられた。しかしこれは見た目にも煩雑であるし、「凡例」6の「文字の訂正等に関する」「」と、同一記号が両様に使用されてゐる事になる。各巻首に白紙か具注曆かは示されてゐるのだから、一つの約束事として「凡例」に断つてをかけるのみで良かったのではあるまいか。

既に与へられた紙数も尽きたので、内容面に触れ得なかつたが、一、二気附いた点を述べれば、P 119の「院御所（常盤）」「院」に（伏見法皇）と注されたが、その直後のP 124の「院」の下に「常盤井殿、新院御所也、法皇両女院自晦夜御所也」と天皇自身が記してをられるから、P 119の院は新院（備カ）後伏見上皇でなければならぬまい。またP 208に「藤原識子」とされ、標出も「儼子」とされたが、同日の事を記した「鷹尾一位局拝賀記」によつても、「識子」のままで良く、「儼カ」の注記は不要と考へる。

以上、村田博士の新著に対し、気附いた点を幾つか記したが、どれも瑣末な事ばかりであつて、本文は不動のものであるから、先づこの宸記を一読されん

事を希望したい。なほ末筆ながら村田博士に対し、非礼の段をお詫びすると共に、全冊の一日も早い完成をお願いしたい。

(昭和五七・一〇・一〇)

(続群書類従完成会昭和五十七年二月刊『史料纂集』の中)

(宮内庁書陵部首席研究官)